



日本の人々に勇氣と自信を

—フレッド・和田^{わだ} 勇^{いさむ}—

十店に増えた青果店の経営に忙しくしていた昭和二十四年（一九四九年）八月、夕食を終えた勇^{いさむ}に、妻の正子^{まさこ}が、

「日本の水泳選手たちが宿泊所を探しているそうですよ。」と、話しかけた。

終戦から四年目、日本は国際水泳連盟に加盟して、八月十六日から四日間、ロサンゼルスで開催される全米水泳選手権大会に選手団を派遣することとなった。

そこで、日本政府は、アメリカ（米国）在住の日系人^{※1}に日本選手の受け入れを依頼した。それは、復興の真ただ中にある日本に、選手を派遣するための経済的な余裕はなく、さらに、戦争の相手国への派遣には反日感情も心配されたからである。

ロサンゼルスでは、日系人たちがこの依頼を受け、渡航費や宿泊所を確保するための招致委員会を結成していた。

「マサ（正子）は、この家に選手を泊めてあげてくれることを考えたわけやな。ええやないか。」と勇はこたえ、早速、知人でもある招致委員会委員長に電話をかけた。

戦後初めてのこの大会への選手団派遣には、多くの日本人の期待が寄せられていた。その訳は、前年に開催されたロンドンオリンピックにあつた。オリンピックに参加できなかった日本水泳連盟は、オリンピックと同じ日程で全日本水泳選手権大会を開催した。その千五百メートル自由形決勝で一着になつた古橋廣之進^{ふるはしひろのしん}



全米選手権の頃の和田夫妻

のタイムは、ロンドンオリンピックで優勝したアメリカの選手より四十秒も速かった。

しかし、アメリカの新聞の中には、食糧難にある敗戦国の日本でこいう大記録が出ることを不思議に思い、「日本のプールはアメリカより短い。」「日本のストップ・ウォッチはこわれている。」等と書くものがあった。

このことを知っていた勇は、歯がゆさを感じていた。

(日本の選手は、力を発揮できれば勝てるはずだ。)

勇は日本人選手の活躍を信じていた。

和歌山県出身の二人を含む六人の水泳選手と役員をあわせた八人の選手団が、勇の家に滞在した。勇は、青果店の仕事をしながらも選手の体調を考え、食事はもとより、細心の注意を払い選手たちの世話をした。

大会では、千五百メートル自由形予選で、和歌山県出身の橋爪はしづめ四郎しろうが、二位のアメリカの選手を百五十メートルも引き離して世

界新記録を出した。さらに、古橋がそれを十六秒余り縮める十八分十九秒〇の世界新記録でゴールした。これには、応援していた人々も大喜びだった。それだけではない。レースを終えて会場を出た二人は、大勢のアメリカの人々に取り囲まれ、「グレート・スイマー」「フライング・フィッシュ・オブ・フジヤマ(富士山の国のトビウオ)」と称賛された。



全米選手権での古橋選手（左）と橋爪選手（右）

この大会で、日本人選手は九つの世界新記録を出し、四百メートルと千五百メートル自由形では、一位から三位までを独占した。日本人選手の活躍は、日本国内では大きく新聞に取り上げられ、「真つ暗闇の中に灯がともったようだ。」と、人々は勇気づけられた。

大会終了後の祝賀パーティーで、勇は、

「古橋さんたちの大活躍によって、ジャップと呼ばれておったのが一夜にしてジャパニーズになり、みんな胸をはって街を歩けるようになった。」

と、話した。

「好成績をあげることができた一番の要因は、宿泊所を提供してもらったことです。」

選手団は、感謝の言葉とともに深々と頭を下げた。

それから勇は、大会後も、アメリカに来る多くの日本人選手たちの世話を引き受け続けた。

昭和二十七年（一九五二年）四月、サンフランシスコ講和条約締結後、日本は国際社会に復帰した。その頃から、「アジアで初めてのオリンピックを東京で」をスローガンにした動きが盛り上がっていった。これには、昭和十五年（一九四〇年）に開催する予定であった東京オリンピックが、戦争でできなかつたという背景があった。また、戦争から復興した平和な日本の姿を世界に知らせたいという国民の願いも高まっていた。

その後、東京は第十七回オリンピック競技大会の開催地に立候補したが、開催地はローマに決定した。続けて東京は、第十八回大会にも立候補した。東京の他には、アメリカのデトロイト、オーストリアのウィーン、ベルギーのブリュッセルの三都市が立候補した。オリンピック開催地を決定する国際オリンピック委員会（IOC）の委員の大多数を占めるヨーロッパの都市や、距離的に近い中南米の委員の支持が期待できるアメリカのデトロイトが優位とみられていた。

日本は、支持を広げるために、勇にオリンピック招致委員を委嘱いしよくした。

「東京でオリンピックができるなら、店のことなどどうなってもいいと思うとる。東京でオリンピックをやれば、日本は大きくジャンプできるのや。中南米の委員が東京に投票してくれるように、全力を尽くすことが僕の使命やと思う。マサ、僕と一緒に中南米に出かけないか。」

と、言った。正子は、

「私はいっこうに構いません。むしろ一緒に行きたいと思っています。」
と、迷わずにこたえた。

昭和三十四年（一九五九年）三月下旬、正子も同行し、二人は中南米九か国を訪問した。勇と正子は、全での訪問に要する費用を自分たちで負担した。また、中南米の国々は、当時治安もあまりよくなかった。

最初に訪問したメキシコの委員は、勇に、

「どうして、そこまでオリンピックに情熱を傾けるのですか。」

と、たずねた。勇は、毅然きぜんとした態度で、

「東京オリンピックの開催こそが、日本の人々に勇氣と自信を与えると確信したからです。そのために微力を尽くすことは、日本を祖国にもつ我々の使命なんです。」

と、こたえた。メキシコの委員は、勇の一点の曇りもない目を見て、他の中南米の委員にも東京を支持する

よう記した紹介状を書いてくれた。勇と正子は、それをもって各国を訪問し、ねばり強く支持を求めた。

運命の五月二十六日、I O C 総会の投票で、東京が第十八回オリンピック競技大会の開催地に決定した。その知らせを聞いた勇は、涙が止まらなかった。

昭和三十九年（一九六四年）八月二十一日にギリシャで採火された聖火は、アジアの国や地域をリレーされて九月七日に台湾から沖繩に到着した。我が国では、本土復帰前の沖繩を皮切りに、四つのコースに分かれて全都道府県をリレーされ、十月十日に開会式場である国立競技場に到着した。七万三千人で埋め尽くされた観客席に、五十七歳になった勇がいた。

聖火台に火をともした走者に拍手を送る大観衆の中で、勇は、喜びをかみしめながら、

「日本人は、みな、ようがんばった。」
と、つぶやいた。



第十八回 東京オリンピック競技大会開会式の様子

※注1 日系人・・・日本から海外に移住し、永住の目的をもって生活している日本人とその子孫。

※注2 ジャップ・・・ジャパニーズの略称として使われ始め、第二次世界大戦前後に日本人と日系人を軽蔑する言い方として使われた。

※注3 本土復帰前の沖縄・・・昭和二十七年（一九五二年）四月二十八日にサンフランシスコ講和条約が発効して沖縄は米国の施政下に置かれたが、昭和四十七年（一九七二年）五月十五日に日本（本土）に復帰した。

（参考文献）

・『祖国へ、熱き心を』高杉良（世界文化社）

（写真提供）

・御坊市教育委員会

・毎日新聞社／アフロ

・共同通信社

・Toyo Miyatake Studio



全米選手権で選手達と握手するフレッド・和田 勇